

花叔三回忌追善集『夢路の葉桜』

—手銭記念館所蔵俳諧資料（十一）—

伊藤 善隆

（立正大学）

摘要

出雲市大社町の手銭記念館に伝来する俳諧資料の中から、花叔三回忌追善集『夢路の葉桜』（己千・東廬・楽二・浦安編、文政九年無味庵跋）を翻刻紹介する。本書は、『雲陽人物誌』を編纂したことでも知られる春日花叔の追善集として重要なものである。

キーワード・俳諧、花叔、浦安、大社、手銭記念館

はじめに

『夢路の葉桜』は、花叔（安永三年～文政七年）の三回忌追善集である。浦安の跋文によれば、編者は己千、東廬、楽二、浦安の四名。このうち、己千は花叔の「家姪」であると本文の作者名の肩書きにある。

花叔については、本書第九号（平成28年12月刊）に「椎の本花叔編『椎のもと』—手銭記念館所蔵俳諧資料（七）—」を掲載した際にも簡単に記したが、本名は春日半蔵、別号は、椎の本、橘庵老人、橘隠など。幼時に魚坊の門下で俳諧に遊び、のち江戸で雪中庵に学んだ。さ

らには名古屋の士朗に入門し、俳号を己千から花叔に改めたという（山崎真克氏『椎の本花叔編『雲陽人物誌』翻刻』（私家版、平成25年9月）参照）。「日本古典籍総合目録データベース」では、『夢路の葉桜』の編者を「亡千」とするが、これは「己千」の誤りで、花叔の前号を「家姪」が継いでいたと考えるのが穏当であろう（たしかに字体は紛らわしい）。

さて、士朗に入門した頃の花叔は信州飯田を本拠としていたが、やがて父が亡くなると、母や兄弟親友の求めに従って出雲に戻ったという。そして、神門郡古志に庵を結び、そこにあった椎の古木と、芭蕉の「先頼む」の句に因んで、椎の本と号した。本書に収録された春声

の序文中には「橘隠の入口なる二本の椎の木」という記述が見え、花叔の庵の目印になっていた様子をうかがうことができる。

本書は、花叔の伝記資料として、また花叔の交遊圏を具体的に知り得る資料として貴重である。ここに翻刻紹介する所以である。

〈書誌〉

書型……半紙本一冊。袋綴じ。楮紙。

表紙……香色原表紙。二二・五cm×一六・〇cm

題簽……原題簽。中央無辺。「夢路能葉桜」。

序文……無心斎一鈞、古稀三耄春声。

版式……無辺無界八行内外。なお、第三丁表・裏のみ左版(薄黄色地)で摺られている。

字高……一四・七糎(序文「橘蔭のく我」を計測)

跋文……日々庵うらやす、九々隠叟無味庵(文政九年四月上浣)。

刊記……ナシ。

丁数……全一八丁(丁付は柱に「二」〜「十八」、但し第十六丁は丁付ナシ)。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。ただし、跋文の漢文の読点は原文のままとした。なお、返り点の明らかな誤刻(レ点の重複、一二点の不備)は、適宜訂正した。また、訓点に見られる合字のコト・シテは、それぞれコト・シテと翻刻した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、()内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

参考のため、原本の参考図版を末尾に示した。

〈翻刻〉

夢路農葉桜

(白紙)

橘隠のうしは、己が親友にして、我室に寓居することも、二十年におよぶ。幼若のころより、棋に能あり、風雅に才あり。ひととなりては、五畿、東海、北陸の隈くまでもたどりくつて、枝のあとを残す。そが中にも、尾の枇杷園にあそびては、蕉門の俳諧に眼をひらき、(一)飯田のさとにかり寐しては、更科の月に李杜が腸をさぐりて、閑雅滑稽に身を避る折から、頻に胸うちさはぎ、そらたちて帰国のおもひをなしけるとなん。これより后、古志の郷なる椎のもとに草庵をいとなみ、その名、遠近に鳴て、門人日夜きそひ来り、花にうたひ、月にうそぶき、をのくこ、ろざし(二)をひとしくす。されども、烏兔移り行ま、に身のいたづき繁くなれるよふ、信ある人はひそくいさめ慰むといへども、過にし申の卯月の央、ひまゆく駒にむちうちて、よもつひら坂を越られしは、(三)が哀はいふ計なし。はじめ椎の本の集ありて、ぬし只やけふをはじめの椎の本、と興ぜられしもきのふけふのこ、ちして、なを感涙(四)胸にふたがる。むれ集る誰もかれも、はらからにはなれしおもひをなして、言んとすれば口を箝み、遂に愁情を詩歌連俳によせて吊はる。その手向草の端を乞れて、ありしことをもを記すのみ。

無心斎一鈞〔式〕〔鈞〕〔鈞〕

〔(三)〕

辞世

橘隠花叔

葉桜や夢のさめたる昼下り

「(ウ三)

四季吟

ちる花に音なくて夜は寐られけり

一日の旅人に似てけしの花

しら露や又燃上る捨篝

首ほどにふりても出す雪の家

「(ウ三)

蕉翁の夏木立は、彼優婆塞の宮の住せたまふ処より出るかしらず。花叔ぬしの椎が本は、翁の木のもとをたよりて此道をたのしみ、世に名をおなじうせんとにやしらざれど、をのれ年頃叔子の風情の厚きをしたひたづねけるも、橘隠の入口なる二本の椎の木を、往來の人の教によてたより見れば、いよ／＼たかく寒空の風をふせぎ、誹諧にわりなく橘隠に」(ウ四) 名をなつかしみけるに、今やよもつ国のまらうど、なられしと、しらせにそでをひたし、暫く感涙にたえず。立よらむ陰とたのみし椎がもとむなしき床と成にけるかな、とおぼろにおもひ出けるも、いづれか幻のすみかならずや。

たよるべき陰さへ椎の夏木立

古稀三毫春声

「(ウ四)

追善各詠端書略

鳴声のはらから悲しほとゝぎす

椎をれてたのむ陰なし夏の水

家姉 仲子

家姪 己千

雲にちる月や雨もつ入梅の窓

椎の葉の露はこぼれて閑子鳥

むつまじき月もさびしや桜の実

椎の木に魂かえり来てほとゝぎす

螢火やきゆる浮世を耀かし

散あとに音は残りけりけしの花

主なき庵や水鶏のかげまはり

なく声は板井にあまるほとゝぎす

卯の花やわれも吹雪の片はしり

五月雨をまたで卯華くだしかな

けしのちる腹にはなにもなかりけり

ほとゝぎす鳴去はてや登天上

コシ 東阜

、智旭

、寿山

、渡舟

、吾友

コシ 掃月

、東廬

、澄水

チミヤ 一釣

、波濤

、素雲

クムラ 布水

椎の叟は風雅に富て、螢雪の窓に」(ウ五) 春秋をとゞめ、月花を自在すれども、消行露の玉の緒はむすび得ず。なくものは誰々ぞや

誰々ぞや

杵築連

うぐひすも椎の若葉に老やなく

葉ざくらの噂となりぬ花の友

なきあとによしなや何を水鶏啼

ほとゝぎすまたゝき重き椎の露

ありし世をしのぶか窓に飛螢

誰がためぞ椎の木末にかほる風

卯の花やなつかしき世を袖の露

椎に鳴声あはれなりほとゝぎす

日々庵 浦安

田柳

安雄

文雅

素川

野塘

管雄

木和

「(ウ六)

もの好は古びて庵の若葉哉

朝水

月と化して雲に入けりほと、ぎす

一止

椎の葉は濡れてある也夏の月

千瓢

おどろきぬ世は浮草の夢ご、ろ

扇風

どの山を越て行しぞほと、ぎす

杵麿 一(ウ六)

卯の華や雨夜は寒き風が吹

巴風

蝶や夢こぼすほだしの花の露

雪貢

卯の花やつらきやたての垣の雪

香雪堂
素号

椎の本の大人は哥鳥のやどれる橋の一本にして、予もこの下
陰に遊ぶことはつか三とせのけふに至、むなしく朽たまひし

は、何ぞや

散けしの我に眼た、きしきり也

イマイチ 待月 一(オ七)

卯の花の散あとくるし閑古鳥

亡人 亀笛

をしむべし若葉の月の雲がくれ

マキ宇 東宇

散行て世にをしまる、ほだしかな

、有中

ほと、ぎす尋て来ては塚に啼

ヒヘハラ 省月

いかにせむ宵月の夜のさてみじか

シンヂ 奇盛

雲州橋や散ても匂ふ此あたり

、春濤

せきあへぬ涙や果は梅の雨

、楽三

ほと、ぎす啼とて月のみやこ入

ヒラタ 春鯉 一(ウ七)

椎ひらふ我衣手のなみだかな

作州カツ山 里翠

手向たき名なり草也仏の座

、孤石

この人をこれにたとへば春の雪

、七尺

涙ともみゆれ柳のあさ雫

、久米人

来る人もくも腹は閑子鳥

大坂 童々舎

かむこ鳥あとのこ、ろに夜を誘ふ

卯の花に闇なし君が行路は

世やうき世これらの人をかきつばた

○

梅の月はなれて丸う成にけり

寵絶て店に出たり竹婦人

萩の華竹に添ふてや丈五尺

須戸にて

入月の母衣をかけたるさくらかな

松二本けふかぎりなる余寒哉

のぼる日に何の香もなし枯野原

嘘いふて小雨に出たりかきつばた

つぼ草のしら露に来よ飛ぶ螢

夕山や雉子の尾につく日の光

うぐひすや梅にかくれて余所歩行

梅壺へおもひもかけず桐ひと葉

あたら夜をねるやとた、く水鶏哉

白萩を押せば雨ふる妻戸哉

萩の戸にむらく白し月の雨

、樗庵

、八千房

、大黒庵 一(オ八)

松江 元日房

ミトヤ 松花

松居

クムラ 布水

今市 寿雀

鳥月

コシ 杜若

、山月

、桂芳

、湖月

、五柳

、柳枝

、鶴遊

、貫之

一(オ九)

追善歌仙

葉ざくらや

夢のさめたる午時下り

ひらく杜律に啼かむ乙鳥

雲を吐浜の岩橋とだえして

古人 橘隠

己千

一釣

くほみくを田にもらふ也
 松一木月のためとや惜むらん
 尾花がそでにつゝむ兔子
 薄霧の見わたし遠き丘の庵
 薪の市女声かしましき
 世の塵を払ふて嵯峨の朝餉
 雪に曲れる風爐先の竹
 稀人をもてなす梅も花もなし
 春をうは気のかしら重たき
 百兩の譲りの金のあたゝかに
 下京へ遣る酒ゑらぶ也
 くやくしくも一番ぶねを乗はづし
 雨の名残をさわぐむら芦
 子につれて求食隙なき月の鶴
 ひたと身にしむ暁のかね
 たゞ泣の病となりし露の世に
 比丘尼たのんで乳母の願立
 順礼の交返したる在郷町
 夕すゝしき冬の若苗
 沙汰すればかならず啼ぬ時鳥
 碁盤の星のきえる粟もり
 唐国のちかいところも何千里
 ふねの甲斐ある伊勢の神風
 ほろくゝと袖にこぼるゝ萩の月
 露のわかれをいそぐ枝折戸

波瀾 東廬 吾友 智旭 樂二 東臯 寿山 素号 浦安 朝水 素川 一止 桮塘 安海 千 釣 濤 廬 友 旭 二 臯 山 号

「(ウ)

「(オ)

肌寒を業平ならばこれも歌
 駕にふられて三日富士見る
 煩へば好のものさへ崇るなり
 麒麟も駑馬におとる大雪
 泰平の世に住はこそ妻よ子よ
 けぶり賑ふ山間のさと
 花ごろも庵のむかししのお摺
 椎の木陰をみだれ飛ぶ蝶
 右首尾
 花叔ぬし身まかり給ふを
 とぶらひ侍りて
 椎のもとをわけてしたふや涼しさの
 かげにすむ夜の月を見すれば
 花の色は常にもかもとおもひしに
 さそふはつらし春の山風
 とゞめえぬこずゑぞしのぶ山ざくら
 花はむかしの春にすぎ行
 忍びつる外山のさくら散過て
 こずゑに花の面かげぞたつ

川 止 央 塘 雄 水 安 執筆

「(ウ)

ヒエハラ成相仲謙 博之

大津山田祐左エ門 秀興

全渡部慶山 行敏

全勇周甫 宣秋

「(ウ)

見し人のなき世にも尚咲いで、
花にむかしの春をわすれぬ

全中山豊助
有常

ことの葉のたねとたのみし花ちりて
その世の春のしたはれぞする

全森廣小左エ門
延興

春ごとに咲てはもろく散る花を
名におふ人のかたみとぞみる

全山田信石エ門
中道

忍ぶよの花はむかしに散過て
はるのかたみとのこることのは

全山田忠四良
春芳

おもひ出て忍びこそすれ春風に
さそはれてちる花の名を

全森廣万四良
真親

山ざくらめでし梢は散はて、
のこること葉に春の花なる

全山田慶蔵
時房

したへども世を捨てて、散花の
わすれがたみや袖の春雨

全久谷廣治
晴房

とひ来ても住ける人はなき跡と
みればかなしき花の木のもと

今市達藤嘉石衛門
白近

はかなしや長くもめでん山ざくら

もろく散にし花の名残を

大津森廣久兵衛
庸徳

言の葉の花のみやびぞ中く〜に
ちりてしのちも匂ひ増れる

大田阪銀左門
宗布

悼春日君花叔

知伊宮多聞院
積慈雲

交情莫逆十余年 看月賞花喜善縁

豈計 邱山吊魂去 焚香献菓礼碑前

全 馬本光明寺 僧本宗

由来晦迹逃名人 棋戯俳言非爾真

勿謂忽辞世去 一朝換骨白雲身

「(オ十四)

全 知伊宮山本権市 山久慶

蕉雨冥濛 四月時 杜鵑声 畔添紅涙

何凶天帝遂招君 白玉楼中新作記

「(ウ十四)

此叟世を謝して既に三とせの月雪をへだつれども、心へだてぬ友垣の
数の言葉をかきあつめて、香花と共に手向ばやと、君が甥なる己千に
うなづきあへる東廬、楽二補助して、遂に小冊となる。」(オ十五) 是を校
合するものは金石の交りをなし

鷗鷺の盟を忘れざる

いさゝの浦人

日々庵うらやす 真菅翁 剗除

「(ウ十五)

先たのむ椎の木もありなつこだち 翁

応需書於花屋裏

奇淵法橋「奇淵」

〔刻陽〕

」(ウ六)

」(ウ六)

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「化政期俳諧再評価のための新研究」(研究課題番号18K00296代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

橋陰花叔、其_レ姓藤原_レ氏春日、通称半蔵也、深沈_ニ雅默_ニ卓識_{トシテ}出群、幼_レ而巧_レ碁_ニ壯_ニ歲東_ニ遊_ス倍_ク精_シ手段_ニ兼粹_ニ誹諧_ニ師_{ニトシテ}於_ニ士朗_ニ究_ニ其蘊_一奧_一友_{ニトシテ}於_ニ蕉雨_ニ遊_ニ彼風流_ニ後飯_ニ旧里_ニ諦_ニ一廬_ヲ於_ニ椎本_ニ從_ニ心所_一レ(ウ七)適_{スル}閑居_ニ十有_ニ余年_一門人許_レ多_ニ其道_ニ歲_ニ盛_也、遠近_ヲ騷人負_レ笈_ニ來_一尋_ニ曾有_ニ斷金之盟_一、花鳥雪月恒_ニ相唱_一和_ス遊_ニ放_ニ會宴_ニ無_レ不_ニ相携_一嗟_レ呼_ニ人生有_レ涯_一誰_カ奈_ニ之何_一、癸未季秋_ニ偶罹_ニ疾病_ニ起_レ臥_レ不_レ穩_ニ于_レ(ウ七)月_ニ于_レ日_ニ憔悴_ニ槁_シ鍼_ニ藥_ニ無_レ驗、甲申初夏_ニ十有_ニ三日_一、行年_ニ五十又_ニ一_一、枕上貼_ニ一吟_一安_ニ靜_{ニシテ}而辭_レ世親戚_ニ遠_ニ失_ニ其望_一也、歎_レ惜_ニ之情_ニ凝_レ而_ニ不_レ消_一経_レ年_ニ愈_ニ慕_ニ豈_レ可_レ得_ニ默_レ而_レ止_一也_一因_レ今_ニ茲_ニ纂_ニ四方之吟_一(ウ八)詠_ニ一_ニ卷_一、焚_レ香_ニ以_レ薦_ニ靈魂_一矣_一諸君欲_レ使_ニ予_ニ題_ニ卷尾_一予_ニ素_{ヨリ}老_ニ羸_一固_ニ辭_{スレトモ}不_レ許_一竟帖_{ニシテ}一語_ヲ寓_ニ生_ニ前_ニ莫_ニ逆_ニ之情_一云、文政九年四月上浣雲州古志郷九々隱叟無味庵敬書「無味庵」(刻陰)「常有」(刻陽)

」(ウ八)

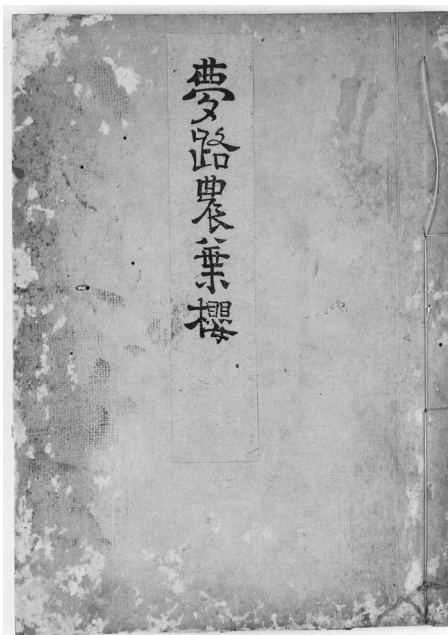
(裏表紙見返し)

〈付記〉

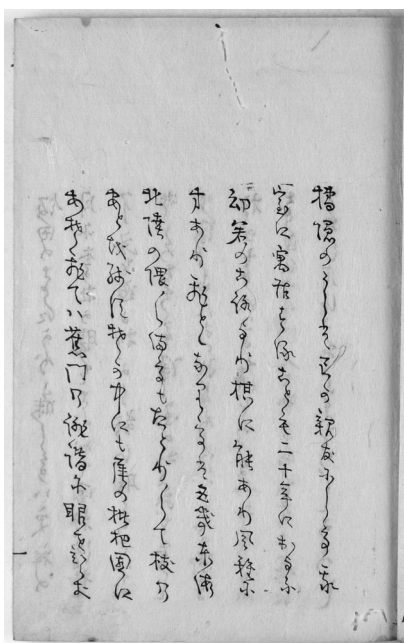
本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

《参考図版》

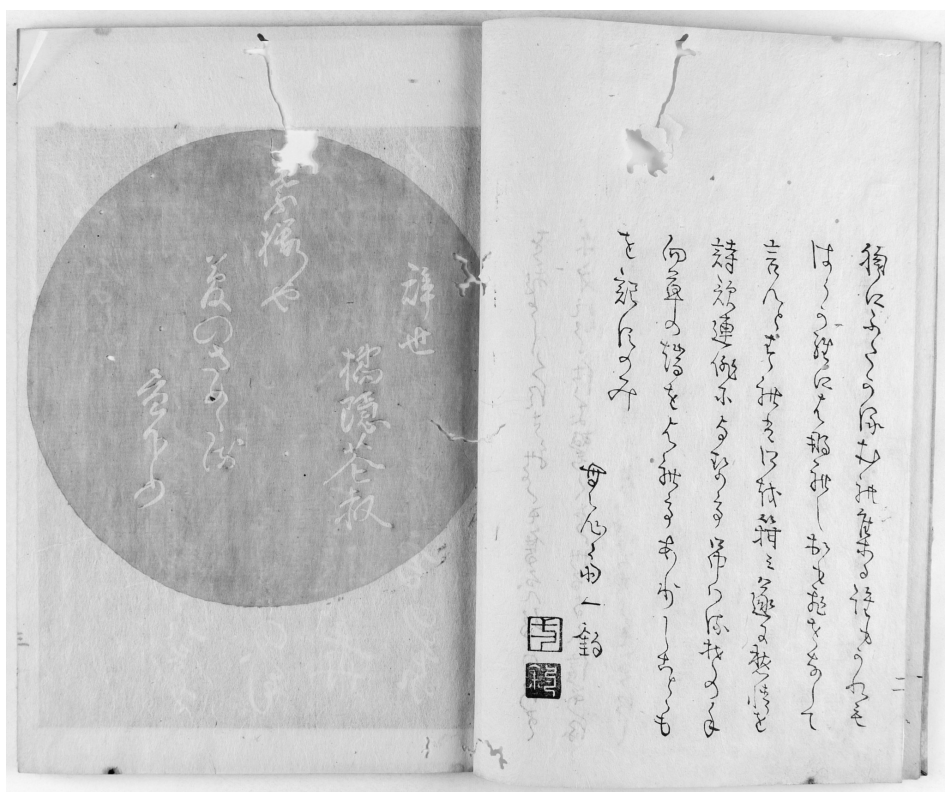
1. 表紙



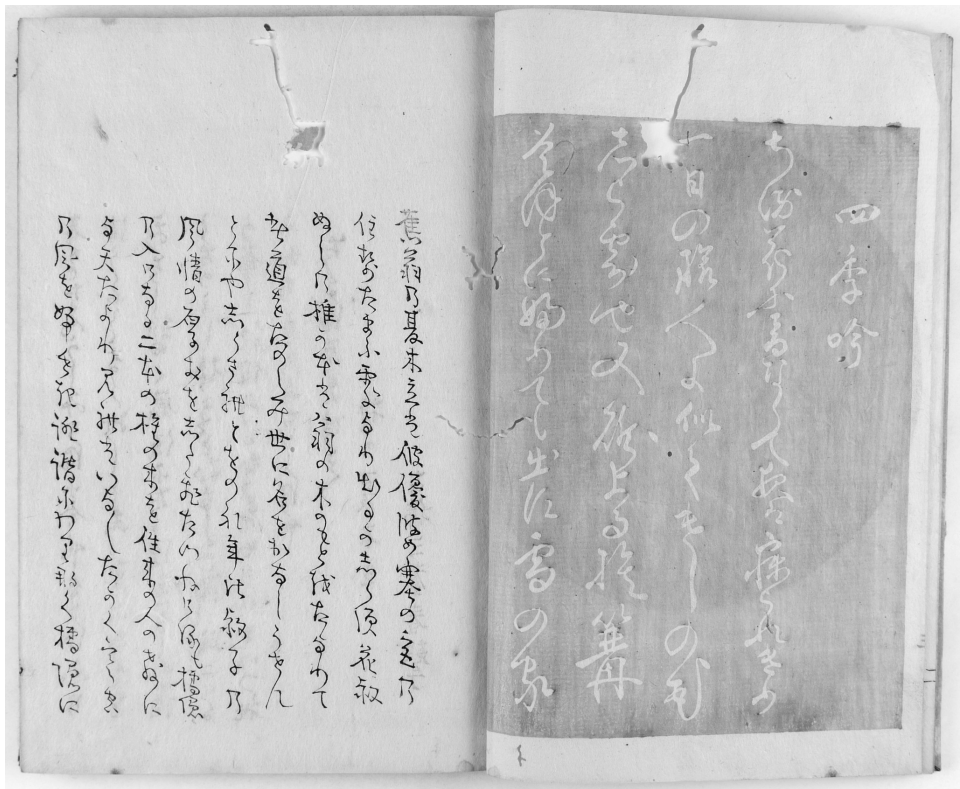
2. 一釣序文冒頭(一才)



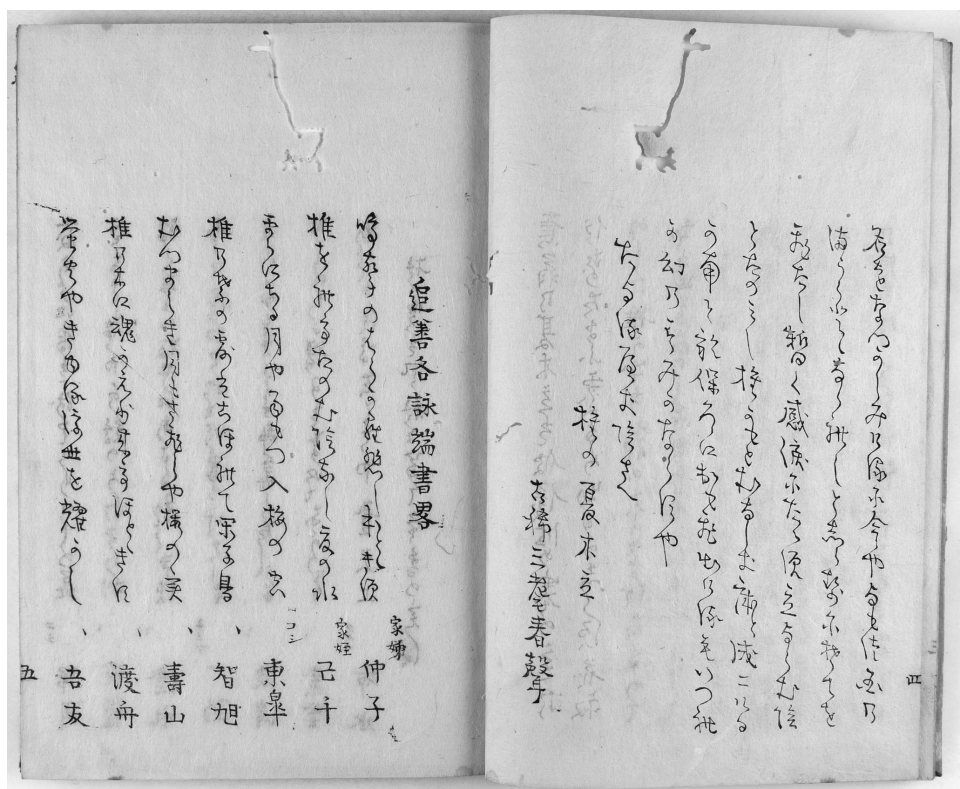
3. 一釣序文末尾・花叔辭世句(二ウ・三才)



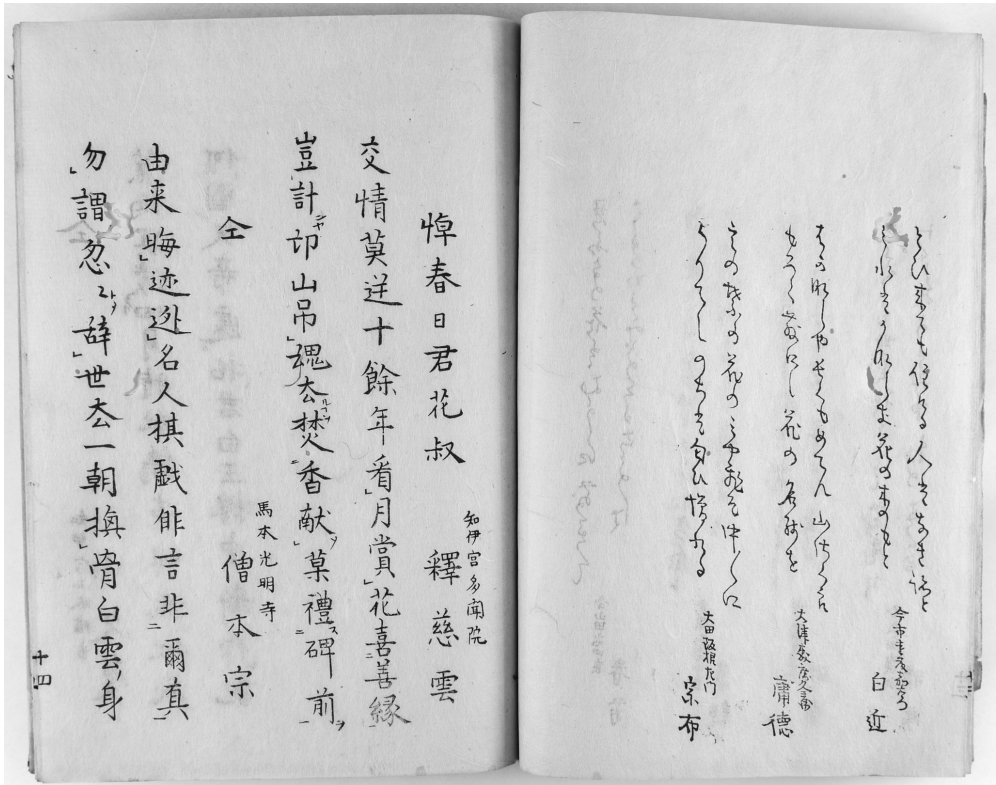
4. 花叔四季吟・春声序文冒頭(三ウ・四才)



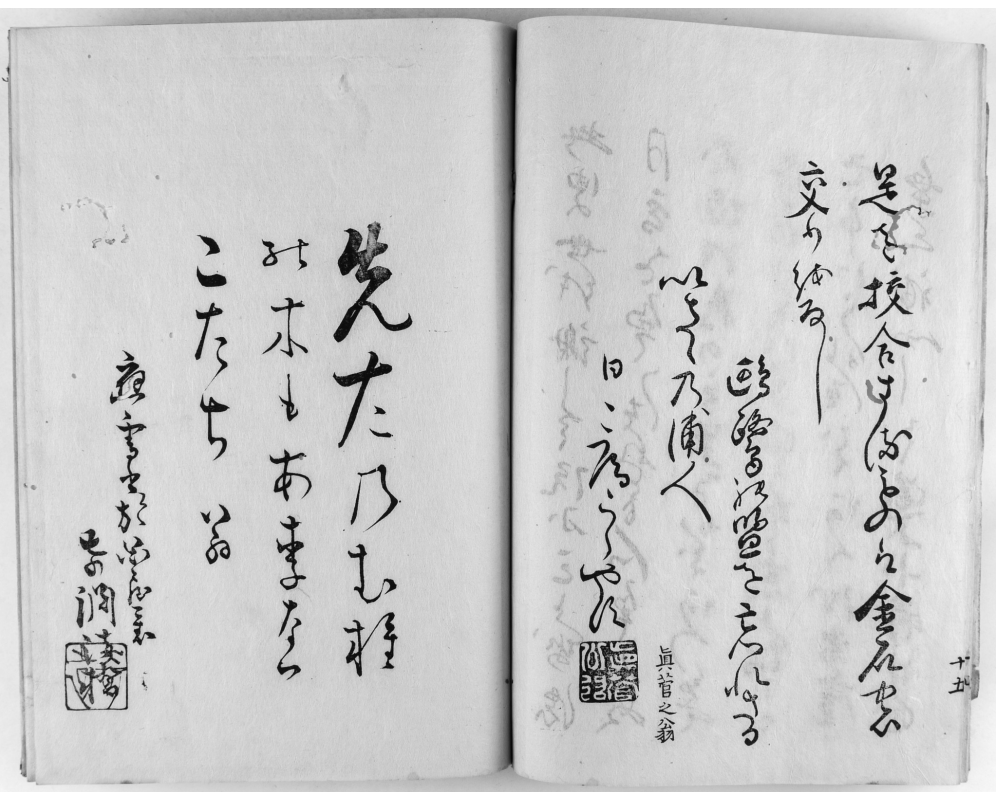
5. 春声序文末尾・本文巻頭(四ウ・五才)

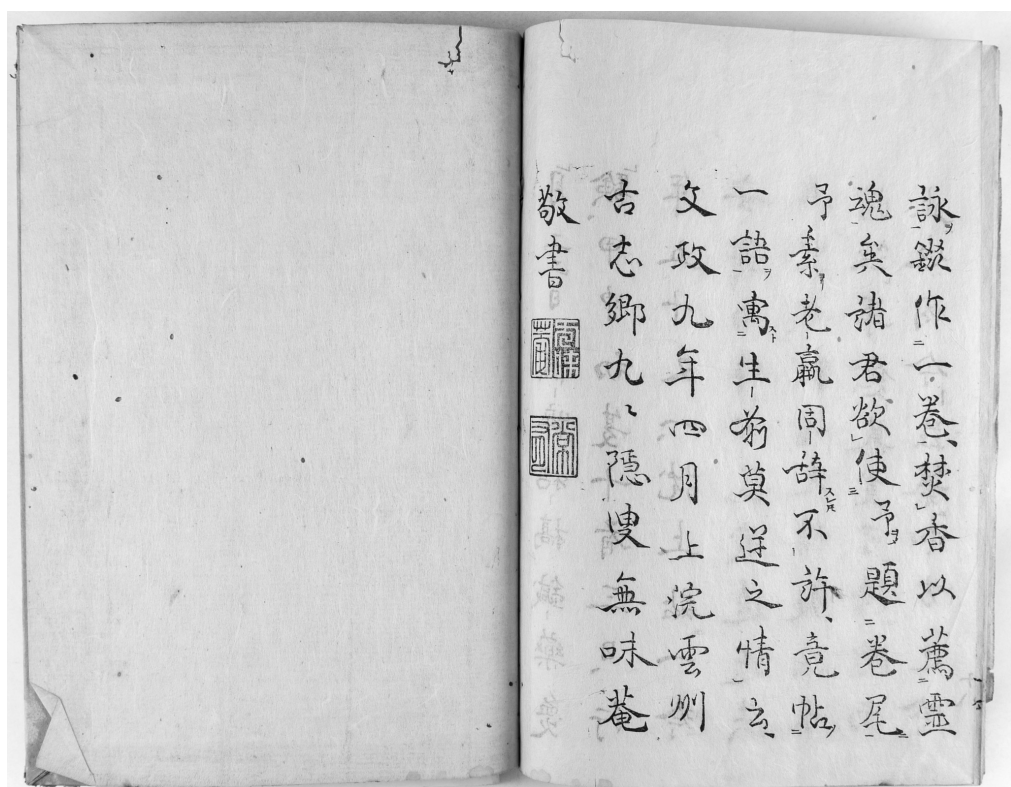


6. 和歌・漢詩部分(十三ウ・十四オ)



7. 浦安跋文末尾・奇淵筆芭蕉発句(十五ウ・十六オ)





詠、嵌作一卷、焚香以薦靈
魂、矣、諸君欲使予題卷尾
予素老羸、固辭不許、竟帖
一語、寓生翁莫送之情云
文政九年四月上浣雲州
古志郷九日、隱叟無味菴
敬書

**The memorial collection tribute to Kashuku
“Yumejino-Hazakura” : reprint and introduction**
— A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (11) —

ITO Yoshitaka
(Rissho University)

[Abstract]

“Yumejino-Hazakura” owned by Tezen Family Archives is a memorial collection tribute to Kashuku. Kashuku was one of the most important haikai poets in Izumo area.

Keywords : Haikai, Kashuku, Urayasu, Taisya, Tezen Museum